

基調講演①：大学が日本語教育のために何ができるか

講演者： モラレス松原礼子（サンパウロ大学）

ブラジルの日本語教育は非常に歴史が長いと言える。日系人だけを対象として見ても、ブラジルの日本語教育は幾世代も超え、今日まで母語・継承語・外国語、そして、グローバル化する中で、第二言語として日本語の言語習得環境は変容している。また、その歩みのプロセスでも、既に、日系・非日系という単純な線引きができなくなり、過去10年にわたり確実に学習者のプロフィールはかつてないほどに多様化している。そういったニーズにいかにか教師や学校運営者は対応すべきであろうか。また、日本語教育を推進している日本側の支援機関、ブラジル側の関係機関、また、日本語が設置されている正規の日本語専攻講座を有している大学等はどういった協力体制を構築すべきなのだろうか。

国際交流基金の調査からも見て分かるように、ブラジルの学習者像は過去10年で変容している。公的の初等教育の学生はほとんど非日系であること、また、日系コミュニティーでの日本語学校ではない、ブラジル社会における高等教育機関等では日本研究、文献研究の領域の学生が増加しつつある。

現在、サンパウロ大学の大学院生（修士課程）だけでも50人以上在籍しており、非日系人の数の方が多い。また、以前は言語、文学が研究の主対象であったが、最近では広義での文化研究に関心が寄せられてきている。正規の学部でも、最近の動向としては、日系人口が最も集中しているサンパウロ州の大学でも日系学生より、非日系学生の割合が増え、7割になっている。新たなニーズへの対応と、ブラジル社会全般に必要な人材の育成、そして大学と社会一般との繋がりの強化がいかにかしてできるか、その改善策がみつかるかを大学院日本語専攻を出発点に考察したい。つまり、他の外国語との横の関係なども考慮し、「日本研究」ができる環境が制度化された南米唯一の大学院の活用を改めて捉え直し、日本研究、日本語、日本文化の価値付けを日本語教育の一環として考えてみたい。

モラレス松原礼子（モラレスまつばられいこ）サンパウロ大哲学・文学・人間科学部東洋学科日本語・日本文学・日本文化大学院プログラム主任教授。主要業績: *Da língua de herança para a língua estrangeira: um olhar sobre as mudanças de ambiente linguístico dos descendentes de japoneses.*

Perez-Tashiro, E.A. (Org.) *In Estudos Japoneses na America Latina.* Editora Lexia, 2015、「ブラジルにおける戦後の日本語学校と日本語教育」森本豊臣・根川幸男(編緒)『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化』(2012年、明石書店)、「ブラジルの日系人と在日ブラジル人」宮崎幸恵(編著)『日本に住む多文化の子どもと教育』(2014年、上智大学版)、『日本語文法のトピック』(編著、2011年、国際交流基金) 他。

基調講演②：「日本語人」という生き方—ことばによって人は何をめざすのか  
講演者：細川英雄（早稲田大学名誉教授、言語文化教育研究所八ヶ岳アカデメイア）

人が他者と生きるということは、それぞれの社会において言語活動の社会的行為主体として他者とかかわりつつ、そのことに対して日常生活の中で自覚的になることであろう。ここでいう「日本語人」とは、日本語を母語とする者という意味ではない。日本語という言語を使用して自分自身の「考えていること」を表現しようとする個人のことである。また、この「日本語」とは、一つの規範的な日本語を指すものでもない。さまざまな地域・コミュニティ・環境における日本語、究極的には、一人ひとりの「この私」の日本語という意味である。そのうえで、一人ひとりの社会的言語活動実践とは、自分の中に「なぜ」という問いを持ち、自分のテーマにしっかりと向き合いながら、相手の自由を認め、その他者との対話によって新しい社会を構想していくこと、ここに、ことばの市民としての対話活動への態度があると考えられる。どこかから与えられた答えを得るのではなく、「私」自身が自らの問いを発見し、この問いの答えを見出す作業それ自体を「私」が仕組むような環境をつくる生き方について論じたい。

細川英雄（ほそかわひでお）1949年 東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒、同大学院博士課程修了。博士(教育学)。信州大学・パリ大学・金沢大学・早稲田大学で、国語教員養成および留学生のための日本語教育に携わる。2001年より早稲田大学大学院日本語教育科の設立に関わり、日本語教員養成に従事する。1990年代後半より、日本語教育と国語教育を結び、第三の言語文化教育をめざす、学習者主体の言語教育理論を展開し、「ことばの市民」という言語活動概念を提案している。現在、早稲田大学名誉教授、言語文化教育研究所八ヶ岳アカデメイア主宰。言語文化教育研究学会・代表理事。著書に『「ことばの市民」になる—言語文化教育学思想と実践』ココ出版（2012）など多数。毎週金曜日発行のメールマガジン「ルビュ言語文化教育」は、2000名を超える読者を有し、ことばと文化の教育に関する情報交流を形成するとともに、読者相互の刺激的な意見交換の場となっている。